

平成 19 年
4 月 26 日

病害虫発生予報 5 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：イネミズゾウムシ	1
麦類：赤かび病	1
ナシ：黒星病，ナシヒメシンクイ	2
ナシ：アブラムシ類	3
促成キュウリ：褐斑病，うどんこ病	3
促成トマト：タバココナジラミ類	4
促成・半促成ピーマン：アザミウマ類	4
夏ネギ：さび病，ネギアザミウマ	5

【その他の病害虫】	6
水稲，カキ，果樹共通，メロン，促成キュウリ，促成トマト，夏ネギ，スイカ	

. 病害虫ミニ情報

ナシに寄生するアブラムシ類の薬剤感受性と防除について	7
イチゴの炭そ病について	8

. 今月の気象予報	9
-----------	---

. テレホンサービス	9
------------	---

029(226)5321, 6131

本文に記載された農薬の登録内容は，平成 19 年 4 月 18 日現在のものです。

水田において農薬を使用するときは，農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに，止水期間を 1 週間程度とすること。

農薬登録速報については，農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/nouyaku/> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. イネミズゾウムシ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

4月25日現在，気温から予想したイネミズゾウムシの活動開始時期はやや遅かった。気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高いため，水田での発生時期は平年並と予想される。

[防除上注意すべき事項]

水田への侵入時期が早いと，イネの生育量が小さいうちに加害されるため，被害は大きくなる。

越冬場所となる山林等に接した水田では発生が多い。例年発生が多い水田では育苗箱施薬を行う。（病害虫発生予報平成19年4月号のミニ情報参照）

育苗箱施薬をしなかった水田や苗の活着が悪い水田では，成虫による葉の食害の他，6月中旬以降に幼虫による根の被害が出る場合があるので注意する。

本田での成虫の生息密度のピーク時期は，5月下旬～6月上旬と予想される。

5月下旬の晴天日に10株あたり8頭以上の成虫が認められた場合は，本田防除を実施する。

本田防除は5月下旬から6月上旬に行う。

本田防除にあたっては，水田から用水が流れ出さないよう畦畔や水尻を点検し，散布後1週間程度は水のかけ流しをしない。

麦 類

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
やや早い	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

本年は麦の生育が平年より早く，4月下旬現在，大麦は穂揃い期，小麦はおおむね穂孕み期～出穂始で，県南及び県西地域の一部では出穂期～穂揃い期の圃場もある。

大麦の出穂以降，曇雨天が多かったため，感染・発病に適した条件であった。

農業研究所の調査によると，本病原菌の胞子の飛散開始時期は平年より早い。

[防除上注意すべき事項]

小麦の防除適期は，開花期（出穂後7～10日）である。圃場ごとの生育状況をよく確認し，適期に必ず薬剤散布を行う。

(麦類 赤かび病 続き)

本病原菌は、麦の開花期から10日程度の間が最も感染しやすく、この期間に降雨が続き、気温が20以上になると本病の発生が多くなる。この間の気象には十分注意し、発病の好適条件が続く場合は、1回目の薬剤散布後7～10日に2回目の散布を行う。ただし、トップジンM水和剤など出穂期以降1回しか使用できない薬剤もあるので注意する。倒伏や収穫の遅れにより発生が助長される恐れがあるため、適期収穫に努める。また、収穫後は速やかに乾燥調製を行う。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

4月下旬現在、全県的な発病果そう率は平年並で、発生地点率は平年よりやや高い。なお、県南地域における発病果そう率は平年よりやや高く、発生地点率は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

果そう基部病斑は、葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第果そうごと除去し、地中深く埋める。

発病果そうを除去後、防除暦に基づき、薬剤防除を確実に実施する。4月下旬の重要な防除を徹底できなかった場合、発生が拡大するおそれがある。

薬剤散布は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

薬剤耐性菌の出現を回避するため、DMI(EBI)剤の年間使用回数は原則3回以内に抑える。

(平成19年4月24日発表の病害虫情報No.2参照)

2. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

4月下旬現在、フェロモントラップ(土浦市、笠間市)への誘殺は平年よりやや早く、誘殺数は、土浦市では平年並、笠間市では平年よりやや多い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

コンフューザーNを設置する園では、設置前にシンクイムシ類の防除を実施する。

防除暦に基づき薬剤散布を行う。薬剤散布量は、10a当たり300リットルを目安にし、丁寧に散布する。なお、防除適期が平年より早まる場合も考えられるため、今後の情報に注意する。

(ナシ 続き)

3. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

4 月下旬現在，寄生新梢率は平年よりやや低く，発生地点率は平年並である。

4 月下旬現在，黄色水盤（笠間市）への飛来時期及び飛来数は平年並である。

気象予報によると，向こう 1 か月の気温は平年並か高いと予想されており，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

園内をよく観察し，発生を認めた場合はできるだけ葉ごと取り除く。薬剤散布は，発生密度の低いうちに防除暦に基づいて行う。

圃場の周縁部など，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。

薬剤抵抗性アブラムシ類の出現を避けるため，同系統薬剤の連続散布は行わない。

促成キュウリ

1. 褐斑病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
-	多い	県下全域

[予報の根拠]

4 月下旬現在，発病葉率，発生地点率ともに平年より高い。

これまでの調査から，4 月の発生量が多い年は，5 月の発生量も多い傾向が認められる。

[防除上注意すべき事項]

収穫終期は，発生が増加する傾向にあるため注意する。

罹病部は新たな伝染源となるため，病斑の多い葉は取り除き，ハウス外に持ち出して処分する。

ハウス内が多湿になると発生しやすいため，適切な換気に努める。

薬剤散布は，薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，同系統薬剤の連続散布は行わない。

（平成 18 年度農業総合センター主要成果（同所ホームページに掲載）参照）

2. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

4 月下旬現在，発病葉率，発生地点率ともに平年よりやや高い。

(促成キュウリ うどんこ病 続き)

[防除上注意すべき事項]

収穫終期は、発生が増加する傾向にあるため注意する。

まん延すると防除が困難となるため、発生が少ないうちに防除を徹底する。

薬剤散布は、薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同系統薬剤の連続散布は行わない。

促成トマト

1. タバココナジラミ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

4月下旬現在、寄生葉率、発生地点率ともに平年よりやや高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると防除が困難となるため、発生初期に防除を徹底する。

コナジラミ類は葉裏に寄生するため、薬剤散布の際は、薬液を下方から吹き上げるようにするなど、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

薬剤抵抗性コナジラミ類の出現を防ぐため、同系統薬剤の連続散布は行わない。

本種はトマト黄化葉巻病を媒介するので、防除を徹底する。

(p.9 「トマト黄化葉巻病について」参照)

促成・半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

4月下旬現在、寄生花率は促成栽培でやや高く、半促成栽培では平年並の発生である。発生地点率は、促成栽培で平年よりやや高く、半促成栽培では平年より高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

アザミウマ類は増殖が速いので、発生が少ないうちに防除を徹底する。

薬剤散布は、薬液が葉裏や花にもかかるよう丁寧に行う。

薬剤抵抗性アザミウマ類の出現を防ぐため、同系統薬剤の連続散布は行わない。

夏ネギ

1. さび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

4月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

発病初期の防除に重点をおき，その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
薬剤散布は丁寧に行う。また，薬剤を散布する際は，収穫前日数に十分注意する。
肥料切れや多肥は発生を助長するため，生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

2. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

4月下旬現在，被害度，寄生株率ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

今後は気温の上昇に伴い増殖が速くなるので，発生が認められる圃場では，できるだけ早期に防除を行う。
粒剤の株元散布処理を実施すると，効率的に防除を行うことができる。
発生源となる圃場周辺の除草を徹底する。

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し，適用作物，使用方法，注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には，周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず，良く洗浄しましょう。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネドロオイムシ	発生量： -	幼虫の発生時期は6月で、この時期に曇雨天が続けば発生が多くなる。県北地域の沿岸部や、河川沿いの水田等で発生が多い。前年多発した水田では、育苗箱施薬を行う(病害虫発生予報平成19年4月号ミニ情報参照)。
	イネヒメハモグリバエ	発生量： -	移植が早い水田や、移植期の天候が不順で、苗の活着が遅れたようなときに被害が出やすいので発生に注意する。
カキ	カキクダアザミウマ	発生量： 平年並	4月下旬現在、発生を認めない。新葉が巻き込む被害が認められたら、直ちに防除を行う。
果樹共通	果樹カメムシ類	発生量： やや少ない ～ 少ない	チャバネアオカメムシの越冬量は、平年より少ない。気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されている。
メロン	べと病	発生量： 平年並 ～ やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	ハモグリバエ類	発生量： やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
促成 キュウリ	べと病	発生量： 平年並 ～ やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	コナジラミ類	発生量： やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
促成 トマト	ハモグリバエ類	発生量： 平年並 ～ やや多い	4月下旬現在、平年並の発生である。
夏ネギ	べと病	発生時期： 早い 発生量： やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
スイカ	ハダニ類	発生量： やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。

ナシに寄生するアブラムシ類の薬剤感受性と防除について

ナシに寄生するアブラムシ類を対象に、平成 18 年版ナシ病害虫防除暦に採用している薬剤に対する感受性検定を行いました。その結果と防除上の注意点についてお知らせします。

【検定方法】

平成 18 年 6 月中～下旬に、県内 4 地点のナシ園からワタアブラムシまたはユキヤナギアブラムシの無翅成虫を採集し、検定に供試しました。検定試験は、成虫を薬液に 10 秒間漬ける虫体浸漬法によって行いました。薬液に浸漬した供試虫はナシ葉片を与えて 20℃ で飼育し、24 時間後の補正死虫率を求めました。

【結果】

ナシのアブラムシ類に対して、イミダクロプリド水和剤（アドマイヤー水和剤）、ダイアジノン水和剤（ダイアジノン水和剤 34）は、安定した殺虫効果が得られました。しかし、DMTP 水和剤（スプラサイド水和剤）、チアクロプリド水和剤（バリアード顆粒水和剤）は、採集地点により殺虫効果にばらつきが見られました（表）。

表 各地点より採種したアブラムシ類に対する各種薬剤の感受性（24 時間後の補正死虫率¹⁾（%）検定

供試薬剤	希釈 倍数 (倍)	採取 地点 アブラムシ 類の種類 ²⁾	A		B		C	D
			1ヶ	7ヶ	1ヶ	7ヶ	7ヶ	7ヶ
イミダクロプリド水和剤	1,000		100	100	100	100	93	100
DMTP 水和剤	1,500		59	97	90	93	74	87
ダイアジノン水和剤	1,000		100	100	100	100	100	100
チアクロプリド水和剤	4,000		100	66	100	100	96	100

¹⁾ 補正死虫率（%） = {（対照区の生存虫数 - 処理区の生存虫数） / 対照区の生存虫数} × 100

²⁾ ワタ：ワタアブラムシ，ユキ：ユキヤナギアブラムシ

供試薬剤については、平成 19 年 7 月 4 月 18 日現在登録があります。

【防除対策】

1. アブラムシ類は増殖が速いため、発生状況に注意し、発生初期に十分な防除を行うことが大切です。薬剤散布の際は周囲への飛散（ドリフト）に十分注意して、徒長枝の先端等にも薬液がよくかかるように丁寧に行ってください。
2. イミダクロプリド水和剤（アドマイヤー水和剤）等のネオニコチノイド系剤は、薬剤感受性の低下を防ぐために、年間の合計使用回数を 2 回までとして下さい。
3. アブラムシ類に対する殺虫効果が低下した薬剤を散布すると、アブラムシ類が十分に防除されないだけでなく、薬剤に弱い天敵昆虫などを殺してしまい、結果的に薬剤を使う前よりアブラムシ類の生息密度が増加することがあります。薬剤散布後は殺虫効果を確認し、次回以降の防除の参考にして下さい。

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載されている適用作物や使用方法、注意事項を必ず守りましょう。

イチゴの炭そ病について

イチゴの炭そ病は、本圃では定植直後から発病し始めます。ほとんどの場合、本圃での発病は感染した苗の持ち込みによるもので、定植後の防除は困難です。このため、育苗時からの防除対策が重要となります。

今年、農業改良普及センターと共同で実施した、イチゴ炭そ病の親株感染の簡易診断によると、すでに本病菌を保菌している株が確認されました。このため、育苗時から防除対策の徹底が必要です！

【炭そ病の特徴】

病原菌は糸状菌で、葉や葉柄、ランナーに病斑を生じ、クラウンに菌が侵入すると株全体がしおれて枯れます。15 以下では症状は現れにくく、20 以上で発病し始め、25～30 が発病適温です。

外観上健全に見えても保菌している株や、被害残渣を含む土壌が第1次の感染源となります。感染は主に降雨や灌水時の水滴の跳ね上がりとともに胞子が飛散し、周辺の株や、ランナー、子苗へと感染を拡大していきます。

【防除対策のポイント】

1) 健全苗の利用

親株は無病地から選抜した、健全な株を用いてください。また親株は定期的に更新する必要があります。

2) 育苗時の管理

(1) 雨よけ栽培を行う。

病原菌は、水滴の跳ね上がりとともに拡大します。このため、降雨による水滴の跳ね上りを抑える雨よけ栽培は本病の発病抑制に有効です。

(2) 灌水方法を工夫する。

灌水による水滴の跳ね上りを防止するため頭上灌水を避け、点滴型の灌水チューブを用いるか、弱い流し水等で行ってください。

(3) 水滴の跳ね上がり対策をとる。

ポット育苗等の場合は、育苗床や通路を透水性のあるシートで被覆したり、プランターを利用して地面から離れたベンチの上で栽培すると、水滴の跳ね上がり防止に効果があります。

(4) 病害が発生しにくい環境条件を整える。

育苗は無病の圃場で行ってください。やむを得ず連作する場合には土壌消毒を行ってください。また、排水の良い圃場で行い、過湿に注意するとともに、育苗時は葉が重ならないように適度な間隔を開けて風通しを良くしましょう。

(5) 薬剤は適期に散布する。

台風など強い風雨があったときや、下葉除去等の株を傷つけるような作業後には、重点的に薬剤散布を行ってください。また、強風雨の翌日等に急激に天候が回復した時は、薬害の発生に注意してください。なお、薬剤耐性菌の発生を防ぐため、同一系統薬剤の連続使用は避け、ローテーション散布を心がけてください。

(6) 発病株を発見したらすばやく対処する。

発病株を発見したら、発病株と周辺の株を抜き取ってください。また抜き取った株は伝染源となるので不用意に圃場周辺に放置せず、肥料の空き袋等に入れて密封して腐らせるか土中深く埋める等、適正に処分してください。

．今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 4月21日から5月20日)

気象庁(4月20日 発表)

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	40	40
	降水量	関東甲信全域	30	40	30
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と比べて晴れる日が多い見込みです。

<1週目の予報> 4月21日(土曜日)から4月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 4月28日(土曜日)から5月4日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 5月5日(土曜日)から5月18日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

．テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号：029(226)5321, 6131

5月上旬 麦類の赤かび病と果樹の病害虫防除について

5月下旬 果樹の病害虫防除について

トマト黄化葉巻病について

今後、気温の上昇にともない罹病株の症状が現れやすくなると考えられる。またタバココナジラミ類も増加が懸念され、野外への飛び出しや、野外からハウス内への飛込みがおこるようになると考えられる。特に冬期に、促成ハウス内でのみ存在していたと考えられる保毒したタバココナジラミ類を、野外に出さないことが、今後の感染拡大を防ぐために最も重要となる。

4月下旬現在、タバココナジラミ類の寄生葉率、発生地点率はともに平年よりやや高いので、今後ハウス内の発生状況に十分注意し、適期防除に努める。

[防除対策]

発病が認められた株は、感染源となるため早期に抜き取り、ビニール袋に入れて密封し、株を枯死させてから処分する。

タバココナジラミ類は、発生が多くなると防除が困難となるため、黄色粘着板を利用するなどして発生に注意し、初期防除に努める。なお、薬剤散布にあたっては、薬剤抵抗性の発達を抑えるため同一系統薬剤の連続散布は行わない。

タバココナジラミ類は葉裏に寄生するため、薬液は下方から吹き上げるように散布する等、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

タバココナジラミ類の生息場所となるハウス内外の除草を徹底する。

ハウスの開口部に設置が可能な場合は、防虫ネット(0.4mm目合い)を設置し、タバココナジラミ類の外部への飛び出し及び、外部からの飛込みを防止する。なお0.4mm目合いの防虫ネットを設置した場合、通気性が低下し、灰色かび病等、病害の発生が助長されたり、ハウス内の温度が高くなったりすることが予想されるので、遮光資材の利用やダクト通風、サイドの開閉等、温湿度管理には十分注意する。